

同輩幼児間の言語的コミュニケーション(会話)に関する研究

— 2歳から6歳までの各年齢群の比較分析から —

龍谷大学文学研究科教育学専攻博士後期課程 山本 弥栄子

1. 問題の所在

1-1. 子どものおしゃべりをみつめる

保育園では、日々子ども同士で共同生活を営み、ことばを用いて相互交渉をしている姿が窺える。ことばを用いた相互交渉、すなわち会話は、発話者と発話者が相互に意見交流する社会的活動であり、会話参加者間に何らかの共通の目的がある言語交流活動、とされる。つまり、会話は相互的コミュニケーションであり、社会的な相互行為であるが故に、話し相手という他者と自己を結びつけるものであるといえよう。ヒトは出生後どのような発展過程を経て同輩間で会話を構築していくのであろうか。現在、幼児期における同輩間の言語的コミュニケーションの発達研究では以下のことが明らかにされている。

1-2. 幼児期における同輩間の言語的コミュニケーション

同輩幼児間の会話が見られ始める2歳後半児(山本, 1998)では、日常体験での決まりきった行動系列が共有されておらず、また適切な手がかりが提出されないため、未展開に終わることが多い。日常的な体験と眼前の事物の支えが2歳後半児における幼児間の会話には必要であり、会話の展開がさらに他の日常的な体験を引き出し、眼前の事物の再構成を促す(内田・無藤, 1982)。特に2歳前半児における観察(遠藤, 1985)では、伝達はほとんど動作と言語が一緒であり、動作を含むと言語だけより理解されやすい。成立要因の高い伝達内容は、提示、譲渡、要求であり、注意喚起、質問、報告で

は不成立が多かった。表出言語面では、遊び的要素の強い「模倣・反復」が最も多くみられた。遊び場面において交わす会話は、①互いの行為を模倣し繰り返し合う遊びの中で生じたやりとり、②掛け声を伴う動作を媒介とし時間的に連続して生起している発話のやりとり、であることが示された。少ない語彙しか持たない2歳初期児同士の会話では、相手または自己の発話を反復的に行うことによって発話の交換が維持されている側面が大きく、何回もの聞き返しを必要とし、Bernstein, D. & Tiegerman, E. (1993) の言うように、2歳半から3歳にかけての幼児は自分の興味内での会話の主題導入を行うものの、1、2交替以上同じ話題を維持させることの困難さがある。しかし、会話を成立させ維持しようとする意図は明確に存在し、成立・維持のための基本的・初歩的技能を有しており、反復的言辞はまさにその技能の1つであるといえる(遠藤, 1985)。つまり、幼児間で一定の内容を伝達し相互に影響を及ぼす言語的技能というのは、既に3歳以前から見られているのである。またこの時期における同輩間の言語的交流の重要点は、①相手から、反応を要求している働きかけを受けた時に答えていく、②反復的言辞の応待ではなく、無駄が少ない形で会話を展開させていくなど、2歳前半から後半にかけて、ある程度幼児相互間において言語伝達しあえるほどの技能を獲得するという点である(江口, 1974)。

幼児期全般の観察として、3歳半から5歳半の以前から面識の無い幼児間の遊び場面の観察では、全発話の62%が一定の反応を受け止め、残りの23%は聞き手の注意を引きつけた。3歳半児で既に伝達内容の返答を受けとめることが可能であったが、年少児では言語的交流の維持はまだ重要ではなく、会話における技法の面では、幼児間の相互関係維持の初期段階であることが明らかとなった(Mueller, 1972)。また子どもの自由遊び場面からとったプロトコルには、多くの自己中心的な言語、復唱や独り言、そして社会的(集団的)独言、呟きや自己応答質問や自己説明などが観察されるものの、それらは相手の子どもも非言語的の行為や会話に適應しており、また社会的言語が多く現れ1つのやりとりを通して相互に応答し合う会話を維持することが出来る。実際に社会的行為が3歳半から5歳までの幼児間で生起すること、つまり、社会的相互作用の中で会話を成立させており、より相手を確実に関わらせる手段が幼児の会話において使用されていることが示唆された(Garvey,

1973)。つまり3歳から4歳の間に、会話の社会的側面に気づき、自分の発話を聞き手の要求に合わせて始めているといえる。さらに2歳よりも5歳の方が社会的な役割に気づいており、自分の発話を自分より幼少児に合わせることもできるのである (Shantz & Gelman, 1973)。

3歳児から4歳児にかけて単なる返答のみならず、新情報を提供して相手の反応を引き出す発話の増加によって、幼児がより長い発話連鎖を維持する能力が獲得されると考察された。陳述発話には、関連反応よりも非関連反応が続くことが多く、ターンが形成されにくいものであるが、①3歳から4歳にかけて関連した反応が後続することが多くなること、②陳述に対する返答にも関連した反応が後続しやすくなることを見出された (深田, 1999)。また4歳半以降、会話の相互作用能力が高まり、相手との協同活動の調整を行えるようになり、幼児間の会話は非相互作用的特徴から相互作用的特徴に変化する。山本 (2001) はこの同輩幼児間の会話発達における質的転換期を4歳半頃と仮定し、この時期における会話の課題として、会話そのものが相手との協力、共同に向かう手段となり得ているかという点を挙げた。

就学前児の会話における未発達な点は、自分の情報伝達が失敗に終わることが多々ある、という事である。それは相手の表情に反応して自分の情報伝達を再組織化して述べることが出来ないからである。伝達情報を明確にさせるためさらに詳細に尋ねる必要が出てくるにも関わらず、明確に限定して相手に述べるよう要求されても応じられないのがこの時期の特徴である。すなわち、より適切に反応する能力は、学齢期になるまで発達しないとされる (Owens, 1992)。幼児期を通して、自発的に会話の発話交換をしようとし、自分の目的を達成するために、多くの言語形式を使用して会話参加者になろうとするが、自分が積極的に話している主題の場合には、まだ会話を独り占めする傾向がある。

6歳から8歳期に亘る幼児期から児童期の同輩間において、機械の説明伝達の実験から、その伝達過程にみられる会話を観察したPiaget (1954) は、子ども同士の理解が成り立つ要因を共通の関心や考えの共有とし、同一の「精神的シエマ (*de schémas communs aux deux enfants*)」が触れ合う時、相互理解が成り立つ、と説明した。これについて青木ら (1976) は、特に共有の媒介物 (機械の説明図の提示) の場合、同輩間に「共通のシエマ」が成立して

いるため、理解度が高く相互理解が成立しやすいと考えた。Levinson (1983) は、話し手の伝達意図が聞き手に認識されることを通じて達成されるコミュニケーションには「共有の知識 (mutual knowledge)」が必要とした。つまり、話し手と聞き手がともに知っている事柄を前提として会話が進行するのである。このように考えると、会話には、会話参加者が共通のテーマ (主題) を保持するという要素が含まれていることが示唆される。

さらに、幼児期の同輩間の会話分析をしたPiaget (1954) は、幼稚園における連続的作業を行っている約20人の自由な会話を観察し、自己中心的言語や独言等も発話の範囲に含めた会話の水準にまで達していない集合的独言を基点として幼児間の会話をいくつかの段階評定した。集合的独語の時期を会話の準備段階として3歳から5歳頃までを段階Ⅰと位置づけ、それは自己中心的思考の性質を残した会話の萌芽期 (*un embryon de conversation*) であり、自己中心的な範囲における応答が生じるとした。次の段階として会話本来の特質および社会的言語の特質をもつ段階として第Ⅱ、第Ⅲ段階を位置づけ、さらにその起源として、A系列は行為と意見の一致 (進歩的協同)、B系列は不一致の観点から分類した。4.5歳から7歳頃までを第Ⅱ段階として位置づけ、ある特定の行為が会話の主題となる非抽象的思考に基づく段階とした。非抽象的思考に基づく会話をさらに段階づけ、第一型式として「自分の見地から話す相手が相手に理解され、他のものの行為と連合している会話」、第二型式として「行為のレベルや非抽象的思考において協同している会話」とした。第Ⅲ段階は抽象的協同の時期であり、その時の活動と連合しない、説明の発見や物語あるいは記憶の再構成、出来事の順序あるいは話の真否を討議する事に関連する7歳以後を、抽象的思考における協同および理由付けをもつ真の論争を内容とする型式として段階Ⅲと位置づけた。

以上の研究から、幼児期は真の論争 (会話) に至るまでの前段階といえよう。では、その真の会話の基礎となる幼児期には、どのような同輩間の会話が成立しているのだろうか。

横山 (1980) は、言語伝達には以下の3つのレベルがある、とした。①コミュニケーションの場の成立：双方がコミュニケーションを必要とし、その限りでコミュニケーションを成り立たせようとする意志が何らかの形で成立している場合、②コミュニケーションの成立：知識や情報が、その交渉によっ

て伝達され、それぞれの必要性が認められる場合、③コミュニケーションの達成：双方の意志の交流が成り立ち、それによって共感と協同の意志が形成される状態、である。

横山の述べる言語伝達は、ある一定の状況下において、話し手と聞き手の役割を相互に交代しつつ、知識や情報を伝え合い、さらに説得によって協同の意志を形成する過程であるが、果たしてこの形成過程が実際に既に幼児期において為され得るか、また同輩幼児間で会話は如何に構築され得るか、分析する必要があると考える。

1-2. 本研究の目的

本研究では、横山(1980)の幼児の言語伝達における3つのレベルを手がかりとし、コミュニケーション達成を獲得するまでの同輩幼児間の会話の発達過程を探る試みとして、2歳後半から6歳半までの幼児期全般を対象に、各年齢群比較における横断的研究を行い、そこから言語的コミュニケーション成立の要因の分析を行うこととした。

分析視点として、(1)「コミュニケーションの場」の成立について、発話の分析と、幼児同士の相互交渉の割合における分析を行った。Eye-contactの維持率の分析を行った。(2)「コミュニケーションの成立」は、言語交流としての相互作用と会話維持率の分析、(3)「コミュニケーションの達成」は、各年齢群において特徴的な会話例を取り出し、プロトコル分析を試みた。

2. 方 法

(1) 観察場所 京都市内K保育園(保育室の一室、以下観察室とする。)

(2) 観察対象

2歳児クラス12名(CA2:8~3:5, Mean2:10, SD2.56, 男6:女6)

幼児ペア9組

3歳児クラス16名(CA3:6~4:5, Mean4:2, SD2.90, 男10:女6)

幼児ペア7組

4歳児クラス17名(CA4:2~5:0, Mean4:8, SD3.22, 男14:女3)

幼児ペア10組

5歳児クラス14名(CA5:4~6:4, Mean5:11, SD3.65, 男10:女4)

幼児ペア9組

観察した幼児ペアは35組、幼児数は計59名であった。

なお、観察への参加は、研究の倫理条項を遵守し⁽¹⁾、誘いかけの際、児の意志を確認し、拒否した児に関しては、観察を強要しなかった。また、観察不能児(お迎えや体調不良などの観察途中児や休園児、途中退園児など)がいたため、その場合は重複児で観察を補った。

(3) 観察期間 2002年7月~10月

(4) 観察手続き

観察はおやつ後、午後3時半から5時半頃に実施した。筆者(観察者)はK保育園5年以上の参加観察者であり、幼児とのラポール形成はされていたと考えられる。予め予備観察または保育士や児への聴き取りにより、幼児の仲間関係を把握した上で観察時の対象ペアを選定し、おやつ時にその日の対象児に観察の旨を伝え、観察室⁽²⁾へ誘いかけた。なお、2歳児クラスの対象児は、保育士に誘いかけを援助してもらった。幼児ペアを観察室に招き、机に向かい合わせた幼児用の椅子に対座してもらう。机には何も提示しない。全クラスの観察ペアに「しばらくお話しして待っていてね」と指示⁽³⁾を与え、2児を残して観察者は退室する。幼児の様子は、ガラス窓付きの扉から観察した(Fig. 1)。記録はビデオカメラ(SONY CCD-TRV80PK)にて行った。約10分の観察後に部屋に入室し、観察終了とした。

(5) 本研究の分析対象

本研究では、ビデオ記録した会話の様子のうち、5分以内のものを分析対象とした。但し、5分以内に何らかの事情(会話の終了、体調不良など)により、部屋のドアを開け、観察者を呼ぶなど退室した幼児ペアは分析対象から除外した。その結果、分析対象となったのは、2歳群では7組(ペア間の年齢幅0~5ヶ月、平均月齢差

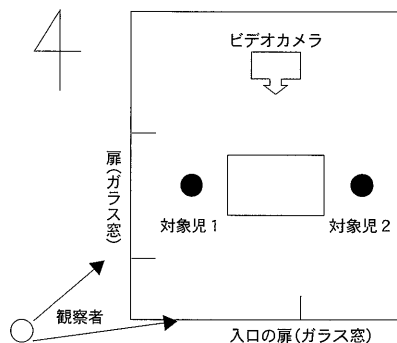


Figure 1 配置図

2.3ヶ月)、3歳群では7組(ペア間の年齢幅0～4ヶ月、平均月齢差1.9ヶ月)、4歳群では9組(ペア間の年齢幅0～8ヶ月、平均月齢差3.3ヶ月)、5歳群では8組(ペア間の年齢幅0～6ヶ月、平均月齢差3.1ヶ月)の31組が抽出された。対象から除外⁽⁴⁾されたのは2歳群で2組、4歳、5歳群で1組ずつの計4組であった。

3. 研究1 コミュニケーションの場の調整

観察室という限定された空間で、幼児同士はどのようにコミュニケーションの場を調整し、成立させているのであろうか。研究(1)では、コミュニケーションの場で発せられた5分間の発話総数(一人平均)を算出し、その中から相互間でのコミュニケーションに関係しない無意味発話を算出した。また「コミュニケーションの場」の形成として、相互の場の共有をEye-contact数において調べることにした。

3-1. 発話量における分析

3-1-1. 発話総数

幼児の発話総数を幼児毎に算出した。本研究では、「発話」を聞き手側が何らかの言語的反応(一語応答も含む)を返すまでの発話者が話した話⁽⁵⁾、とした。その際、同一児の発話で、2秒以上間隔の空いた発話は別の発話単位として計上したが、2秒以内の発話でも、先行発話と後続発話の関連性が見出せないものは別の発話単位とみなした。(例えば、①相手に叩かれて「イッテ」と答えるが、すぐに「ゼンゼンイタクナイ」と虚勢を張った言語反応を返した場合、②大声の相手に対し「シズカニ!」と伝え、すぐに「アッ、コレショウカ」と別の提案をした場合など)笑い声や掛け声、叫び声などの発声や非言語的反応(肯き等)は分析に含めない。但し、歌などの無意味な発話は分析に含めた。

その結果、各年齢群で右記のような平均発話総数が得られた(Table 1)。各年齢群の一人あたりの平均発話総数

Table 1 発話総数の平均値と標準偏差

	2歳	3歳	4歳	5歳
N	348.0	319.0	440.0	437.0
\bar{X}	20.4	22.8	24.4	27.3
SD	12.8	13.3	7.7	6.5

注：N＝総数， \bar{X} ＝平均値，SD＝標準偏差

は、2歳児クラス24.86話、3歳児クラス22.79話、4歳児クラス22.44話、5歳児クラス22.63話であった。発話総数が最も多かったのは2歳児であり、最も少なかったのは5歳児クラスであった。一元配置分散分析を行ったところ、各年齢群に有意差は無かった ($F=0.190$, n.s.)。

3-1-2. 相互交渉に無意味な発話

各年齢群における無意味な発話の一人当たりの平均発話数を算出したところ、2歳群では4.7話、3歳群では1.3話、4歳群では1.9話、5歳群では0.8話であった。

一元配置分散分析を行った結果、2歳群と3歳群、4歳群、5歳群に有意な差がみられた。 ($F=7.026$, $P<.01$)。TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、2歳群と3歳群、2歳群と4歳群、2歳群と5歳群の平均値の間に有意な差が認められた (Table 2)。結果より、無意味発話は2歳群が他の全ての年齢群よりも多いことが明らかとなった。無意味発話の多かった2歳児と、次に多かった4歳児の発話内容を比較してみると、2歳群は歌やリズムが多く、相手の発話に対する模倣などが多かった。4歳群はつもりあそびにより、相互交渉を行わず、一児が役のイメージになりきった発話が多かった。その中には発話者に対する応答 (「○○ってどうやって変身するの?」など) も含まれていたが、応答の枠を超えて役になりきり、会話が中断された場合のケースが多かった。

Table 2 無意味発話の平均値

	2歳	3歳	4歳	5歳
\bar{X}	4.7	1.5	1.9	0.9
<i>SD</i>	6.01 ^a	1.65 ^b	2.25 ^b	1.0 ^b

注：異なるアルファベットの付いている条件間において、5%水準で有意差あり。

3-2. 幼児間の対面場面としての相互交渉率

3-2-1. Eye-contact

Eye-contactにおける各年齢群の平均維持時間は、2歳群は80.3秒、3歳群は69.1秒、4歳群は60.2秒、5歳群は53.0秒であり、年齢が上がるるとともに幼児同士の視線の交合は徐々に減少した (Fig. 2)。

Eye-contactのタイミングとしては、2、3歳群は、自分が発話する際、また相手の発話を聞く際にEye-contactをとっていたが、4、5歳群になると、

相手の表情を見ずに相手の発話を聞きながら発話内容を受け止める傾向にあった。このことは、限定された観察場面において2、3歳では、発話を聞くだけでなく視線の交合によって相手の発話を解釈しようとしておりその行動自体が相手と相互交渉をとろうとする現われであると

推測される。またそれに反して5歳前半児ペアでは、相互間で別々の場所を見ていたとしても、相手の発話内容を聞いて受け止め、それに対しての返答を思慮している姿であると考えられる。

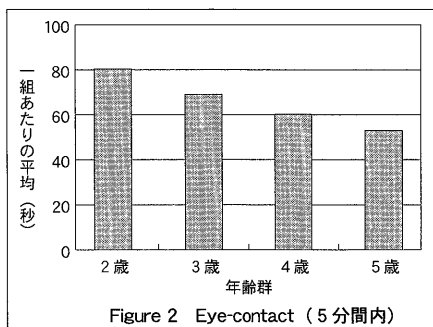


Figure 2 Eye-contact (5分間内)

3-1-2. 離席回数 「コミュニケーションの場」の調整

幼児ペアの相互交流の調整をみるために、席を離れた回数を計算した。一単位の離席回数は、「児が席から腰を上げ立位をとり、椅子から1歩以上離れてから、再び座る姿勢に戻るまで」を一回と算出した。各年齢群の離席回数の一人平均は、2歳児クラス1.14回、3歳児クラス2.5回、4歳児クラス1.8回、5歳児クラス1.2回であっ

た (Table 3)。3歳児が最も離席回数が多かったが、一元配置分散分析を行った結果、各年齢群に有意差はなかった ($F=1.057$, $n.s.$)。

Table 3 離席回数の平均と標準偏差

	2歳	3歳	4歳	5歳
N	16.0	35.0	33.0	17.0
\bar{X}	1.13	2.5	1.8	1.1
SD	1.63	2.35	3.07	0.81

課題遂行時における離席の理由に関して年齢群ごとにその離席の理由を調べた。離席理由として、①走り回る (ふざけて離席したものを含む)、②部屋の外への興味・関心 (不安・心配の表れも含む)、③部屋の中への関心・興味、④離席した相手への注意、⑤会話終了による明示、⑥その他 (無言での離席などの理由不明) の6点を挙げ、年齢群毎に分析を行った。各年齢群における離席理由の件数はTable 4の通りである。

離席理由の内容を平均回数でみると、2歳群は外への関心を持つ行動を示

Table 4 各年齢群の離席理由別分類とその回数

年齢	離席回数	①走り回る	②外への関心	③中への関心	④相手の注意	⑤終了の明示	⑥その他(不明)
2歳	16(1.13)	2(1.00)	12(2.00)	2(1.00)	0	0	0
3歳	35(2.5)	4(1.3)	8(1.6)	16(2.7)	1(1.0)	4(2.0)	2(1.0)
4歳	33(1.8)	8(2.0)	22(2.8)	3(1.5)	0	0	0
5歳	21(1.3)	4(1.3)	8(1.1)	4(1.0)	0	4(1.0)	

※ () 内は平均値。

した児が多く、特にその場にいる不安状況の現われとしての離席が多かったと考えられる。発話内容をみると「(観察者が)どこ行ったのかな?」「お外行ったのかな?」などの観察者の存在を気にする発話が大半であった。3歳群では、部屋の中への関心を持つ行動を示した児が多く、ビデオカメラを触る、横のドアのガラス窓から外を覗く、ふざけるなど、設定された観察時間内の間、椅子に座ることができないペアが比率的に多かった。4歳群では、外への関心が多く、また無意味発話の結果から、ふり遊びでの離席があった。5歳群では、ふざける、外への関心の他に、自発的な会話終了の明示を行ったペアが比率的に多かった。

4. 研究2 コミュニケーションの成立 —相互的情報伝達—

研究(2)では、コミュニケーションの成立として、会話参加者間において相互的な情報伝達が為されているかどうかを探究した。まず会話における相互作用の分析として、観察された意味語の発話機能を非相互作用的和と相互作用的和の発話に分類し、各年齢群間で比較した。次に、会話の維持機能として相互間における発話の交換数を年齢群比較した。

4-1. 会話における相互作用の分析

4-1-1. 非相互作用的和の発話と相互作用的和の発話

観察された発話を、お互いの交流を行うための機能を為さない発話を非相互作用的和の発話(以下、NUと記す)として分類した。NUは、相手に伝える意思の無い発話や相手の発話に無関心な発話であり、相手の反応を期待しない叙述や、歌、独言(自己活動の叙述、感情表現)などである。NUの例をTable 5に示す。

Table 5 非相互作用発話 (Non-interactive Utterance) の種類

分類基準	発話例
(1) 場面・状況に対する叙述 (外への関心も含む)	Ex. 「(先生) どこ行ったのかな?」(3歳) 「(部屋の戸) 開けたらだめだよ」(4歳)
(2) 自己活動への集中の時の独言 (相手に伝える意思の無いお話)	Ex. 「ウルトラマンが来てな」(4歳) 「ネコちゃんがお散歩行ってな」(2歳)
(3) 感情表現の独言	Ex. 「(扇風機を見て) わあ、涼しいなあ」(4歳)
(4) 自分の要求を通すための依頼	Ex. 「トイレ行きたいし、先生呼んできてよ」(5歳)

次に、お互いの交流を行うための発話や相互に相手と共同しようとする発話、また言語交流を通じて相手に情報を伝達しようとする発話を相互作用的発話（以下、IUと記す）として分類した。IUは、相手と交流しようとする意思のある教示や説明、勧誘や提案、質問や相手に対する応答などである。IUの例をTable 6に示す。

Table 6 相互作用的発話 (Interactive Utterance) の種類

分類基準	発話例
(1) 情報伝達 (教示・説明も含む)	Ex. 「僕な、お休みの時、お猿見に行ったで」(6歳)
(2) 協同活動 (勧誘・提案も含む)	Ex. 「あっ、そうだ。明日の天気どうかな? ってお話しよう」(4歳)
(3) 質 問	Ex. 「今、あの時計、何時?」(5歳) 「なあ、仮面ライダーアギト (TV番組) 逮捕されたん知ってる?」(5歳)

4-1-2. 会話の相互作用における各年齢群比較

NUとIUを各年齢群の総数をTable 7、Table 8に示す。 χ^2 検定の結果、年齢群差は有意であった ($\chi^2=401.518$, $df=3$, $p<.001$)。残差分析を行った結果、NUは2歳 ($p<.05$)、3歳群 ($p<.01$) に有意に多く、5歳群 ($p<.01$) に有意に少なかった。IUでは2歳、3歳群 (共に $p<.05$) に有意に少なく、5歳群 ($p<.01$) で有意に多かった。非相互作用発話は2、3歳に多く、相

Table 7 各年齢群のNU総数と相互発話総数

	2歳	3歳	4歳	5歳
NU	190	255	146	73
IU	34	64	294	289

Table 8 Table 7の各セルの調整された残渣

	2歳	3歳	4歳	5歳
NU	2.52*	3.84**	-1.61	-2.64**
IU	-2.49*	-2.56*	1.59	2.6**

* $p < .05$ ** $p < .01$

相互作用発話は5歳に多いことから、4歳台において何らかの相互作用的な言語活動の獲得が為されることが示唆された。

4-2. 会話の維持能力

4-2-1. 会話成立形態における発話交換数

発話の交換数 (Turn-taking) を分析する際、有意味語を分析対象とし、文脈に添わない言葉の繰り返し、模倣などは分析に含めなかった。また同じテーマの発話交換は一つの単位として維持数を算出した。発話交換数2は、いわゆる応答形態であり、発話者に聞き手が応答する「発話者→聞き手」の段階である。発話交換数3以上の会話は、2者間のやりとりであれば「発話者(A)→聞き手(B)→発話者(A) (波多野, 1960)」もしくは「発話者(A)→聞き手(B)→発話者(A)あるいは(C) (Piaget, 1954)」というように発話が3つ以上相互連続した形態である。これらの最小単位は会話型式として「同一の主題について三つの継続的な話が、少なくとも二人の対談者によってなされる」状態として定義される。発話交換数3以上の会話維持について各年齢群の比較をした。

4-2-2. 発話交換数3以上の会話数

発話交換数3以上の会話を詳細に分析すると、2歳群では9、10ターン維持されたペアが7組中2組であり、あとは6ターンまでの維持数であった。3歳群では、11、15ターンまで維持されたペアは7組中2組 (29%) あり、あとは10ターンまでの維持数であった。4歳群では、11、13、15ターンまで維持されたペアは9組中4組 (44%) あり、あとは9ターンまでの維持数であった。5歳群では、11、13、15、17、20、33ターンまで維持されたペアは9組中6組 (67%) あり、あとは9ターンまでの維持数であった (Table 9)。

Table 9 Turn-taking 3以上の成立数

	2歳	3歳	4歳	5歳
交換数 (Range)	3～10	3～15	3～15	3～33
交換単位 (個数)	3 (10)、4 (1)、5 (2)、 6 (1)、9 (1)、10 (1)	3 (25)、4 (1)、5 (7)、 6 (3)、7 (3)、10 (1)、 11 (1)、15 (1)	3 (41)、4 (6)、5 (3)、 6 (9)、7 (7)、8 (1)、 9 (4)、11 (2)、13 (1)、 15 (1)	3 (31)、4 (5)、5 (2)、 6 (5)、7 (1)、8 (2)、 9 (2)、11 (2)、13 (1)、 15 (1)、17 (1)、33 (1)

発話交換の内容をみると、2歳、3歳群では、発話者の発話に対して聞き手が一語応答（「うん」というあいづちや頷きなど）が多く、4歳群では、発話者と聞き手の声が同時的な部分重複（オーバーラップ）があるなど話者交替に不安定性がみられるものの、5歳近くになると相手の発話が長くても話が終了するまで待つことができるなど徐々に話者交替が可能となった。また発話特徴として、記憶再現過程としての発話（「あんなー」「んとなー」「それでなー」）が4歳群では増加した。5歳群では、応答のみではなく、発話内容が聞き手にとって不可解な内容であった場合の聞き返しや、話の続きを聞き出す発話（「花火して、それから何した？」等）などが多くみられた。これらの結果より、2、3歳群では話者交替が行われるものの主に相手の発話への応答というパターン構造がつよく、4歳台になると自分と相手の意見交流の質をもった話者交替の獲得が可能になり始めると推察される。

5. 研究3 コミュニケーションの達成 一 意志交流 一

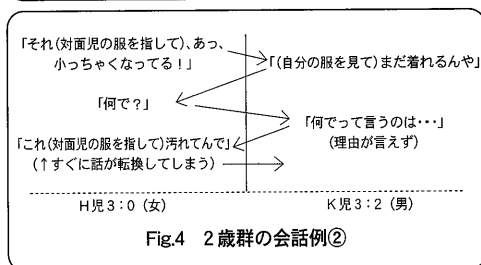
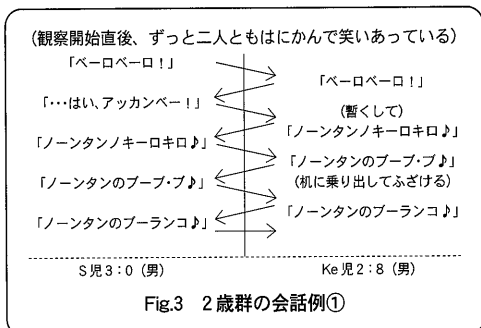
研究（3）では、コミュニケーションの達成として、会話参加者間において意志交流が為されているかどうかを探るため、意志交流の成立に関してプロトコル分析を加えながら検討を行うこととした。ここでの意志交流は「周りの状況や何かを対象とした説明ではなく、自分自身の意志を分析し、意志を発して相手がそれを受け止め反応を返した場合（横山, 1980）」とした。観察された会話のうち、各年齢群において特徴的なプロトコルを抽出して分析を行った結果、以下のような会話特徴が観られた。

5-1. 2歳群における意志交流

2歳児は、言語を使ってお互いに意志交流を行うことが少ないものの、歌や笑いなどによって、気持ちの交流を行っており、場面での楽しみ方をしていた。言語模倣（叫び合い）やリズムなど、低月齢児（ペア内に2歳児がいる場合）においては、相手の言動の模倣や歌の歌いあいでのコミュニケーションの場を維持する姿が多くみられた。Fig. 3にみられるように、観察開始後お互いの表情を見合いながらも、ことばのやりとりを行っているが、発話者の発話語尾を模倣しあう事によってコミュニケーションの糸口を探している

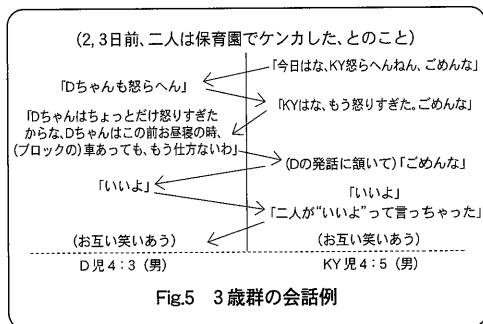
姿がみられた。

また会話の媒介物要因としては場面の説明、相手の所有物や相手の体の一部への質問と説明など主として媒介物を介した会話であった (Fig. 4)。離席理由との関連性も示唆されるが、観察室に取り残された不安の現われである発話から推測されるように自身の思いが表出されていた。すなわち2、3歳児においては「意志」という明確な意志をもった表現ではなく、その場で感じたり思ったことなどの「意思」の言語表出が中心であるといえよう。



5-2. 3歳群における意志交流

4歳になると、媒介物が無く、日常性の高い主題(園生活での決まり事や自分の家族の話など)における会話が可能となる。4歳前半児ペア (Fig. 5) では、数日前の出来事を捉え、相手との関係に基づいて自己の活動に対する意思表示を行うことが可能である姿が窺える。強くはっきりした意向としての「意志」の表出は観られず、未だ「意思」の表出の特徴を残すものの、2者関係において相互間で「意思交流」を行う姿が観られた。



5-3. 4歳群における意志交流

4歳前半児と後半児のペアでは、Fig. 5, Fig. 6にみられるように (Fig. 5のKY児の第二発話、Fig. 6のA児の第二発話)、適切な言語説明には至らず、不十分な言語提示に終わっている。しかしながら、媒介物が無い条件においても、また同一経験をしていない相手に対しても、会話が成立している (Fig. 6)。なおかつ過去の経験の語りなど時間的文脈の広がりが見られ、テーマ性のある会話が成立しつつある。また発話交換数が11回維持されるなど、文脈における発話解釈能力が獲得され始めていることが示唆される。

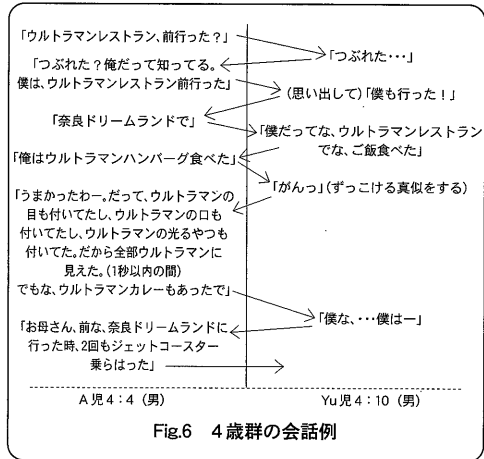


Fig.6 4歳群の会話例

5-4. 5歳群における意志交流

5歳群では、予備観察の結果より、実在する事物を介した会話ではなく、相互間で共通のテーマを媒介にして会話が維持されることが明らかとなった。相互間の「共有テーマ保持」は、同じテーマに基づいて自己経験提示を行い、聞き手が類似経験の出力(言語表出)をした上で両者の共有テーマ保持が為される。また「将来について」をテーマに語る際、自分の意志だ

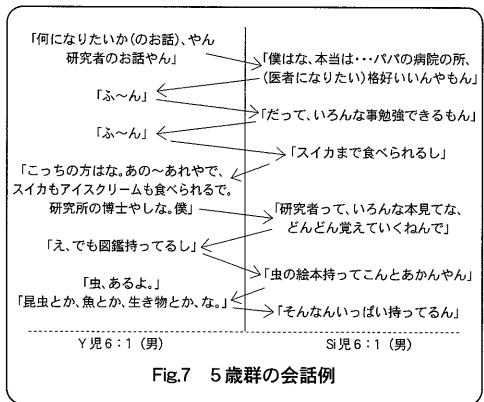


Fig.7 5歳群の会話例

けでなく、その理由を伝えることができる (Fig. 7)。相手との相互交流の手段として、自らの意志表出を行うことで相互間の会話の維持・発展が行われていると考えられる。観察された発話内容から、メタ認知的な発話（「今、ビデオ撮ってるよ」「その変な格好、ビデオに写ってるよ」等）があり、これらの能力が会話を円滑にすすめる要因の一つになっていると考えられる。

6. 総合考察

6-1. 同輩幼児間の会話過程での発達的变化

本稿では、2歳から6歳までの同輩幼児間の「会話」において、その発達の変化を探るため、各年齢群での比較を行ってきた。ここで明らかとなったのは以下の点である。

- ①無意味発話は年少の2歳群が最も多い。
- ②発話総数は各年齢群間に差がみられないが、発話内容においては4歳群以前と4歳群以降で差がみられた。
- ③年少群よりも年長群の方がEye-contactは減少するが、それに反して会話の質は上がる。
- ④5歳後半以降の幼児は、相互間で共通のテーマを媒介に会話が成立する。
- ⑤幼児期全般において相互間の意志交流の萌芽があるが、質的には「意思」表出に近く、幼児期後期である6歳頃に「意志」交流の芽生えがみられる。
- ⑥会話内容をみると、幼児期を通して、自己中心的伝達から相互作用伝達への移行が為される。転換期は4歳台にあると推察される。

横山の提起したコミュニケーションの3つのレベルであるが、①コミュニケーションの場としては、歌やことば遊びなどの無意味な発話も含めて相互間でのやりとりが交わされており、既に2歳群でコミュニケーション場の調整が始まっていると考えられた。②コミュニケーションの成立としての相互的情報伝達は、非相互作用的な会話から相互作用を為す会話への特徴的变化が4歳群を転換期として取り出せた。③コミュニケーションの達成は、幼児期全般において「意思」交流が中心であり、本格的な「意志」交流はそれ以降、児童期に行われると考えられた。

6-2. 幼児間の言語的コミュニケーション成立に関する教育的課題

2歳から6歳に亘る幼児期において、同輩間での会話を教育的観点から支援していくならば、幼児間の会話の発達の過程で質的变化のあることが明らかとなった、次の二つの時期が挙げられるであろう。

第一に、2歳後半から3歳頃、対大人との相互作用的伝達における足場かけ(Scaffolding)を無くした、同発達水準の対児関係による応答が成立する時期である。幼児期の会話場面における応答能力の重要性に関しては、以前から指摘されてきたが(大井, 1995)、2歳後半から3歳頃の幼児は、同輩間での応答能力を有しており、Eye-contactや歌遊びなどのことばのやりとりによって相手と何らかのコミュニケーションをとうろうとしていた。したがって相互間の応答能力の確認と、相手との発話交換において相互間のコミュニケーションの調整を行わない単なる発話の繰り返し(オウム返しや言語模倣)ではなく、文脈に添って相手の発話を受け止めた応答が可能であるかどうか、を確認する必要がある。

第二に、4歳半～4歳後半頃、「ことば」での会話ではなく、「思考を潜った」会話を為す時期である。4歳頃になると他者との会話がほぼ成立するとされる。これについては、思考の発達(記憶力やイメージ保持の発達)、語の修正や文脈理解の始まり、他者の視点取得などの要因が挙げられる。このことは、幼児期の会話研究において研究対象では4歳以降を主流とするものが多いことから明らかである。自らの意図を発話の中に込めた発話を用いて、また相手との相互交渉として言語交流となり得ているかの確認が必要である。特に媒介物を共有せず言葉でのやりとりを可能とし、思考を潜った会話を中心となるため、十分に待ち、思考を通したことばのやりとりを行う援助が求められると考えられる。

【文 献】

- ・青木民雄・横山明・吉野要(1976) 児童の言語による伝達行動に関する研究 児童教育学科論集(愛知県立大学文学部児童教育学科, 愛知県立女子短期大学児童福祉学科) 9 p. 45-51

- ・アメリカ心理学会（編）富田正利・深澤道子訳（1996）サイコロジストのための倫理綱領および行動規範 日本心理学会
- ・D.K. バーンスタイン, E. テイガーマン編（1994）子どもの言語とコミュニケーション：発達と評価 東信堂(Bernstein, D. & Tiegerman, E. (1993) *Language and Communication Disorders in Children.* : Macmillan, Inc.)
- ・江口純代（1974）幼児のコミュニケーション行動の発達 —遊び場面における2幼児間の相互的言語伝達の分析— 人文論究 34 pp. 15-38
- ・遠藤純代（1985）2歳児の遊びにおけるコミュニケーション行動の分析 人文論究 45 pp. 41-64
- ・深田昭三・倉盛美穂子・小坂圭子・石井史子・横山順一（1999）幼児における会話の維持：コミュニケーション連鎖の分析 発達心理学研究10（3）pp. 220-229
- ・Garvey, C. & Hogan, R. (1973) Social speech and social interaction : Egocentrism revisited. *Child Development.* 44, pp. 562-568
- ・Harris, Z. (1951) *Methods in structural linguistics.* Chicago : Univ. of Chicago Press. p. 6,11
- ・秦野悦子（1998）会話が成立するときしないとき 秦野悦子・やまだようこ（編）コミュニケーションという謎 ミネルヴァ書房 pp. 129-146
- ・波多野完治・辻正三・滝沢武久（1960）コミュニケーション行動の発達の研究（1）—4歳児から8歳までのパーソナルコミュニケーションの発達— 東京大学新聞研究所紀要 第9号 pp 57-82
- ・本郷一夫（1996）2歳児集団における「異議」に関する研究 —子どもの年齢と年齢差の影響について— 教育心理学研究第44巻 第4号 pp. 435-444
- ・倉盛美穂子・高橋登（1998）異なった意見をもつ児童間で行われる話し合いの過程の発達の検討 発達心理学研究 9（3）pp. 191-200
- ・倉持清美（1992）幼稚園のものをめぐる子ども同士のいざこざ —いざこざで利用される方略と子ども同士の関係 発達心理学研究 3（1）pp. 1-8
- ・木下芳子・朝生あけみ・斎藤こずゑ（1986）幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達 —3歳児におけるいざこざの発生と解決— 埼玉大学紀要教育学部（教育科学）35 pp. 1-15
- ・McCarthy, D. (1929) A comparison of children's language in different situations and its relation to personality traits. *Journal of genetic psychology.* 36 pp. 583-591
- ・Mueller, E. (1972) The maintenance of verbal exchanges between young children. *Child Development.* 43 pp. 930-938
- ・Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics.* Cambridge univ. Press. : Cambridge. (安井稔・重田夏子（訳）英語語用論 研究社)
- ・日本発達心理学会（監修）（2000）心理学・倫理ガイドブック 有斐閣

- ・大井学 (1995) 言語発達の障害への語用論的接近 風間書房
- ・Owens (1992) *Language development : An introduction* (3rded). Columbus, OH : Merrill/Macmillan.
- ・Piaget, J. (1954) 大伴茂訳 臨床児童心理学 1 児童の自己中心性 pp. 117 - 150. (Piaget, J. (1923) *Le langage et la pensée chez l'enfant*. Delachaux&Niestlé pp. 79 - 95, pp. 125 - 127)
- ・Rees, N. (1980) The Nature of language. In T. Hixon, L. Shriberg, & J. Saxman (Eds.), *Introduction to communication disorders* (pp. 2 - 41). England Cliffs, NJ : Prentice Hall. p. 38
- ・Shantz, M., & Gelman, R. (1973) The development of communication skills. : Modifications in the speech of young children as a function of listeners. *Monographs of the society on Research on child Development* 38 (55).
- ・内田伸子・無藤隆 (1982) 幼児初期の遊びにおける会話の構造 お茶の水女子大学人文科学紀要 第35号 pp. 81 - 122
- ・横山明 (1980) 子どもの言語伝達行動にはどんな特徴があるか (横山明・高垣忠一郎編 小学生の発達と教育 三和書房 pp. 102 - 137)
- ・山本弥栄子 (1998) 2歳後半児における会話の構造と保育の課題 — 相手との調整を中心として — 佛教大学教育学部教育学科卒業論文 (未公刊)
- ・山本弥栄子 (2001) 幼児間の会話発達に関する研究 (2) — 3、4歳台における会話の特徴分析 — 第68回日本応用心理学会大会論文集 p. 40

謝 辞

本研究における幼児間の会話データは京都風の子保育園の研究協力に基づいて観察したものです。長期間にわたる横断的な観察に御協力戴きました保育園の園長先生はじめ、クラス担当の先生、そして多くの園児の皆様にご心より感謝申し上げます。

また本稿は1998年3月佛教大学教育学部教育学科に提出した卒業論文における研究視点に基づいて研究を続けてきたものです。卒業論文時にご指導戴きました高橋司先生に深く感謝申し上げます。

【注】

(1) 幼児期初期児の観察について

本研究では、観察の開始対象として2歳児を取り上げ、限定した観察室での観察を行った。2歳児は特に場面の切り替えや観察者の信頼関係の形成などが必要となる時

期であり、スムーズに観察場面に導入することに困難が生じる場合も考えられた。そこで本研究では、観察以前にラポール形成にあたり、対象児の意思を尊重し、事前に拒否の意思表示をした児に関しては観察を中止した。観察実施にあたり、主に日本発達心理学会の倫理条項を参考とし、他に日本教育心理学会倫理綱領、サイコロジストのための倫理綱領および行動規範を参考にした。

(2) 観察室

観察室は、通常1歳児の午睡や延長保育など、多目的に使用されている保育室である。観察室の間取りはFig. 1の通りである。部屋の大きさは4.7m×1.8m（窓は北側と西側に一つずつ、床はコルク質、天井中央には首が無回転の扇風機が1つ）である。

(3) 5歳児群の教示について

予備観察（8月実施）により、5歳児群における幼児ペアの会話では、テーマ提示無しの観察を行った際、10分間の在室が不可能であった。テーマ提示無しの場合、NUは97.1%、IUは2.9%であった。観察者がテーマを提示して観察した結果、NUは40%、IUは60%であった。このことからテーマ提示無しの場合、NUが有意に多く、テーマ提示有りの場合、IUが有意に多いことが示された（ $\chi^2=17.496$, $df=1$, $p<.001$ ）。以上のことから、5歳児群では自由な会話能力が既に獲得されており、また日常的に相手との相互交渉は発話交換である会話によって為されていると推測された。これらのことから、限定された観察場面において、テーマ教示無しによる観察は、会話の維持・発展の観察という観察者の研究意図とは異なる結果が得られると考えられた。したがって、5歳児群においては、テーマ教示を行った上で、その後の会話に関して観察することとした。行ったテーマ教示は以下の三種類である。場に応じて適宜テーマを提示した。（テーマ①「好きなお友達は誰ですか」「何故そのお友達が好きなのか、（対面児に）教えてあげてね」、テーマ②「大きくなったら何になりたいですか」「何故それになりたいか教えてあげてね」、テーマ③「お盆休みに何をしていたか教えてあげてね」）

(4) 対象除外の理由として、2歳児では、2組の幼児ペアとも片方の一児が観察室へ入室したが場所に慣れなかったため、自発的に部屋を退室し、その旨を観察者に訴えたためである。4歳児では、観察室に入ったものの観察者の再入室まで待てず、ペアのうち一児が観察1分30秒後に自発的に部屋を退室し、5分間の観察時間が維持できなかったペアが1組あった。5歳児では、相互間で会話をしながら待っていたものの、5分間の観察時間が維持できず、一児が自発的に4分後に部屋を退室した。

(5) 発話の定義（Harris, 1951）

「一人の話者による、あらゆる長さの話で、その人に関しては、その前後に沈黙を伴うもの」